

厳寒の砌^{みぎり}

30年数年も昔の話だが

「厳寒の砌（みぎり）」などという古めかしい表現になるが、この時候のあいさつは、ここ数日の寒さを実によく言い表している。

毎年、暮れになって寒さを感じるようになると思い出すことがある。

もう30数年前の話である。

大学の1年だったか2年だったか。

親しくなった学生に、北海道日高出身の朝日新聞奨学生がいた。新聞配達店に賄い付きで下宿し、朝晩の新聞配達に従事し、その給与をもって大学に通う、いわば苦学生だった。当時の新聞の休刊は日曜日の夕刊に1月2日くらいだったから、それ以外に彼が自由にできる時間はない。帰省はもちろん泊まりで外出などははじめからないものとしている学生生活だ。

その彼がつぶやいた。「正月くらい帰りたいなあ。この一言が心に響いた。

私の家は沼津市だ。帰ろうとすれば、2時間もあれば帰ることができる。正月で久しぶりに友人たちと会う楽しみを捨てればのことだが…。しかし彼は新聞配達の代役がいなければ、日高に帰る術はない。

「新聞配達代わってやるうか？」

こうして、私の真冬の新聞配達が始まった。

何しろ大学入学までもない4月。朝起きたら窓の外が異常に明るい。不思議に思って窓を開けたら一面の銀世界。9月には炬燵が出ている。大学生に机は不要で、勉強、食卓、すべての用をなしているのは炬燵だ。12月には富士山から流れくだる清流に20センチほどのつららを見る土地柄である。

寒さは尋常ではない。

午前2時半。もそもそと布団から抜け出し、洗面して着替え、昨夜仕込んでおいた電気釜のスイッチを入れると真冬の早朝を自転車走らせて下谷の新聞配達店に向かう。

古くは織物が主産業だったこの町は富士山の裾野に位置して上谷、下谷というように上から下への勾配をなし、町中を流れ下る清流で染め物を洗ってきた。季節が季節なら心地よい水音に、水車の回る音が響いてえも言えぬ情緒を醸し出しているが、この季節は、この涼しげな水車の音は勘弁願いたいところだ。

12月下旬の午前3時といえは、耳が痛くなるほどに凍てついている。暗がかりを転げるように下る自転車が切っていく空気は固い。

新聞店の店先は、こうこうとした灯りがともされ、ストーブ代わりの石油缶に火付けられて炎がさえている。闇に踊る鮮やかな炎だ。黒い闇に包まれた静寂の中にそこだけが昼間を持ち込んだようになっている。

新聞配達の仕事は、新聞を配ればよいというものではない。自分の配達分125軒ほどの新聞を配達順に組んでいく。これが重要だ。これを誤ると配達には泥沼にはまる。朝日新聞奨学生といっても朝日だけを扱うのではない。山梨日日、朝日、毎日、読売、スポーツ紙もある。中でも朝日新聞は、朝夕刊購読している家と朝刊だけの家とでは紙面が違っている。その違いを見分けるのは、一面の日付の横にがついているかどうかだ。それらを配達順に慎重に組んでいく。慣れた配達員は、それらがすべて記憶されていて順番を書き込んだカードを見ることなく、手

早く組み込んでいく。速い。200部ほどの新聞があつという間にしつらえられてしまうのだ。こうして仕込んだ新聞の束をもって、漆黒の闇の中に入って行く。午前4時。

闇が深いという表現があるが、そのとおりだ。鳥は、夜間目が見えないということで、鳥目というが、鳥目ならずとも、まるで墨汁の中に浸っているような深い闇の中で一寸先が見えない。

思い出せば様々なハプニングに見舞われた。足下が見えず、どぶ板を踏み外してどぶ水の氷を割ったこともある。軒先のつららに頭をぶつけ、何かと手をやればつららで軍手は濡れて手が凍え、表札が見えなくて右左していたら、いきなり足下で犬に吠えられて犬を踏んづけた…。

富士山からやがて相模川となつて下る桂川にかかる吊り橋を渡った頃、夜はしらじらと明けてくる。吊り橋向こうの城山の麓で朝の朝刊配達は終わるが、その頃には山峡（やまかい）の町には曙光が射し込み、吊り橋から見える桂川の崖上の谷村駅には小さな電車が入ってくる。世界が動き始めるのである。

漆黒の闇は薄墨の世界に、薄墨の世界はやがて家屋や木々や水面が東から黄金色に輝き、次第に淡いながらも彩色の世界に変わっていく。川面に朝靄がたち、家々に灯がともし出され、早出の出勤者にも出会う。

新聞を配り終えて軽くなった自転車で上谷に向かつて坂を上り、汗ばんだ体をアパートに戻すと、行きがけにスイッチを入れた電気釜は保温になって迎えている。

共同炊事場で味噌汁をさっさと作り、菜もないご飯と味噌汁だけの朝食は、気がつけば、五合炊きの釜を空にしていた。

あれから30数年。私はあれほど美味しい朝食を未だ食したことはない。

30数年前の話で、「過ぎ去りしことは美しきかな」は例外ではない。美しく書いたとしても、正直、学生がほとんどいなくなった学生アパートに一人正月を過ごす自分は孤独で、がらんとしたアパートは気味も悪かった。愚直で、どこかに偽善のある自分が、はたまた青白いヒューマニストを演じた自分がいたのかもしれない。損得で考えたら間尺に合わない選択だったろう。しかし、「新聞配達代わるうか」の一言を発しなかったら、一日が明けていくドラマに感動をもってひたることはなかったし、普段見慣れた街に美しさを見いだすこともなかった。あれほど美味しい朝食を味わうこともなかったに違いない。

そこは流れる時間の中での一瞬の選択が与えてくれた世界であった。

一瞬の選択のもとに、様々な世界が描き出されていくのが人生だ。一コマ一コマの世界がムーディフィルムようになって、メロディを奏で自分だけのストーリーを創っている。世界は同じようで同じではないのである。教育はそのストーリーづくりに働いている。

今日は何をしようか？

「教育は、人間が人間として幸せに生きていくために行うものである」

= EU閣僚会議教育文化青年局長

Allen forrest 1996.9 =